時性3例（肝動注施行3例）であった．

胃癌肝転移症例においては原発巣切除に加え肝動注により予後の向上が期待できる．

19）吸着型血漿浄化を行ったメソトレキサート（MTX）中毒の1例

伊藤　実・加藤　俊幸
斉藤　征史・丹羽　正之（県立がんセンター新潟病院内科）
井上　博和・小越　和栄（県立がんセンター新潟病院内科）
小林　宏人・守田　哲郎
平田　泰治・堀田　利雄（同　整形外科）

症例は17歳男性．平成4年10月5日に，左大腿骨遠位骨肉腫と診断された．MTX 大量療法（200 mg/kg）を4コース施行後，同年12月21日，広範囲切除，Kotz 左人工膝関節置換術を施行．術後，MTX 大量療法（200 mg/kg）を4コース施行したところ，4コース目の治療の後，MTX 血中濃度が下がらず，WBC: 1800，Hb: 8.3 g/dl，Plt.: 3.5×10^4，GOT: 353 IU/l，GPT: 675 IU/l，LDH: 978 IU/l，TB: 5.8 mg/dl，PT: 64.9 %，BUN: 52 mg/dl，クレアチニン：7.6 mg/dl と，骨髄抑制とともに，肝・腎不全を生じた．MTX 中毒と診断し，ロイコボリンレスキュー下に MTX 吸着による血漿浄化方法を9回施行した．MTX 血中濃度の低下とともに，肝・腎機能が回復した．MTX 中毒は予測できず，突然重篤な副作用として発現することがある．MTX 中毒に対しては，ロイコボリン投与とともに吸着型血漿浄化は有用であると考えられた．

20）胸部食道（表在型，sm）・胃（m）・直腸（m）に発生した同時性三重複癌の一症例

川田　清・谷口棟一郎
家里　裕・勅使河原修
高尾　昌明・濱田　邦弘（小千谷総合病院外科）
横森　忠紘
福田　剛明（新潟大学第二病理）

胸部食道・胃・直腸に発生した同時性三重複癌を発見し，1期的治癒切除術を施行した．三臓器癌はいずれも表在型癌であった．今回，若干の文献的考察を加えて報告する．

症例は，72才男性で，1993年6月，易疲労感，食欲不振にて来院し，精査の結果，胸部食道 Im に広汎な表在型病変（扁平上皮癌）を，胃体下部大弯前壁に IIc 病変（高分化型腺癌）を，直腸 Ra に山田IV型ポリープが発見された．1993．8．31．右開胸開腹，胸部食道全剔・胃部分切除・経胸骨後頚部食道胃管吻合・内視鏡的直腸ポリペクトミーによる1期的治癒切除術を施行した．病理所見は，食道癌 Im，0-IIa+0-IIc，well diff. SCC，sm，n_3（+），胃癌 M，IIc，tub 1，m で，直腸ポリープは粘膜に限局した cancer in adenoma であった．我国で今までに報告された食道・胃・大腸の同時性三重複癌のうち，1期的根治手術例は本例を含めて4例で，その全てが表在型であったのは本例が初めてである．

21）胃癌症例における腹腔内洗浄細胞診の検討

植木　匡・武者　信行
藪崎　裕・鈴木　茂
武藤　一朗・西巻　正
藍沢喜久雄・鈴木　力
田中　乙雄・畠山　勝義（新潟大学第一外科）

1987年より1992年までの6年間に術中腹腔内洗浄細胞診を施行した胃癌手術症例308例（左右横隔膜下およびダグラス窩の3ケ所より洗浄液を採取）中 cy（+）の50例（16%）に対し検討を加え以下の知見を得た．1）S_2 面積の増加に伴い cy（+）率も増加したが s（−）の5症例にも cy（+）を認めた．2）癌の局在と cy（+）部位に関連が見られた．3）肉眼形は3，4型が多く組織学的には低分化癌，n（+），INFβ.γ，および ly（+）が多かった．4）Stage 2 以上の ly（+）の1年生存率は46%と cy（−）に比べ不良であった．5）ダグラス窩陽性と陰性群間および陽性部位が1カ所と3カ所群間の予後に有意差を認めた．6）切除群の再発形式は腹膜播種が多く50%無病期間は10カ月であった．

胃癌洗浄細胞診陽性症例は浸潤傾向の強い低分化型が多く予後不良である．

22）進行消化器癌に対する温熱療法の自覚症状改善効果に関する検討

藤井　久一・相川　啓子
豊島　宗厚・曾我　憲二（日本歯科大学新潟歯学部内科）
柴崎　浩一

【目的】手術不能と診断された進行消化器癌に対して化学療法併用温熱療法を施行し，その自覚症状改善効果について検討した．

【方法と対象】方法は 13.56 MHz の RF 誘導加温装置（HEH-500）を用い，1回／週，40分間の加温を原則とし，施行時に全身化学療法も併用した．対象は十分